

暇を思う存分過ごす様子を、実にリアルに、生き生きと描き出した。それが、『ツバメ号とアマゾン号』(一九三〇)から『シロクマ号となぞの鳥』(四七)までの一二冊である。六作目の『ツバメ号の伝書バト』(三六)がその年に創設されたカーネギー賞の初の受賞作となった。いわゆる休暇物語に新風をもたらしたこのシリーズには、解放された子どもたちの喜びがあふれている。ありふれた平凡な子どもたちの、日常的な事実を、鋭い観察眼でつぶさに描き、読者に物語の主人公たちと行動をともにしている感を起こさせる。子どもの世界の真実をありのままに描くことの重要さを示し、その後の児童文学に多大な影響を与えた点で、ランサムは一九三〇年代のリアリズムを代表する作家といえる。日本には六〇年ごろから訳出されはじめ、六七年から『アーサー・ランサム全集』全一二巻が刊行された。【参考文献】瀬田貞二・猪熊葉子・神宮輝夫『英米児童文学史』(一九七一 研究社) (谷口由美子)

リ

リア エドワード Edward Lear 一八一二〜一八八  
 イギリスのナンセンス詩人、画家。二人姉妹の二〇番目に生まれ、病氣や父の破産などで屈折した内面をもつようになった。動物細密画から風景画に転じ、生涯独身でイタリア、エジプト、中東などを放浪した。子どもたちに即興の絵と短詩リメリックをつくり、『ナンセンスの本』(一八四六)にまとめたほか、『Toughable Lyrics 滑稽抒情詩集』(七七)など独特の造語を駆使したナンセンス詩や物語やアルファベットの本と旅行記がある。(吉田新一)

李園友 ウリョム 리원우 一九一四〜 朝鮮民主主義  
 人民共和国の児童文学作家。平安北道義州郡の生まれ、一九三〇年義州普通学校卒業後、農学校に入る。三二年「プロレタリア児童文学会」結成後、カップの影響下で創作に励む。朝鮮作家同盟中央委員、児童文学分科委員会委員長歴任。代表作に長編童話『斧將軍』(一

九五四）、『青銅のかめ』(五一)、『十二の実のなる木』(五三)をはじめ童謡、評論多数あり。最もポピュラーな作家の一人である。  
(韓 丘庸)

李園友 えんゆう → リーウォオヌ

李元寿 げんじゅう → イーウォオンス

李光洙 こうしゅう → イーグアンス

李在徹 さいてつ → イージェチオル

リシユタンベルジェ アンドレ Andre Lichtenberger 一八七〇—一九四〇 フランスの小説家、社会学者。

『十八世紀における社会主義』で学位を得る。『小さいトロット』(一八九二)、『トロットの妹』(九八)は中流家庭の子どもの日常を扱った作品であるが、描写に際して子どもの視点が貫かれ、心理、行動を綿密に書きあげている。日本でも昭和初年に単行本として翻訳されたほか、鈴木三重吉がその描写を高く評価、『赤い鳥』に一部を訳出している。  
(佐藤宗子)

リース デイヴィッド David Rees 一九三六—

イギリスの作家、批評家。教職生活のかたわら二〇冊にのぼる児童書を執筆、一九七八年の『エクセター大空襲』でカーネギー賞を受賞。アイルランド問題を扱った『The Green Bough of Liberty 自由の緑なす枝』(一九七九)などの歴史小説のほか、『Silence 沈黙』(七九)をはじめとする現代小説では、若者がぶつかるさまざまな問題を取りあげている。現代の児童文学を論じ

た評論集に『水の中のビー玉』(八〇)などがあり、また大人の小説も出版している。  
(早川敦子)

李寧 熙 せい → イーニョンヒ

リハーノフ アリベルト・A Альберт Антольевич

Лиханов 一九三五— ソビエトの児童文学作家。キエフ市に生まれる。ウラル大学新聞学部卒業後、ジャーナリストとして働く。現在も若者の雑誌「あとつぎ」の編集長。「ライフワークは文学の創作」という。『けわしい坂』(一九七三)、『Обман』(七四)、『音楽』(七一)、『なぜおとなになるの?』(七六)など多くの作品があり、ソビエトの青少年文学賞のレーニン・コムソモール賞を受賞。  
(北畑静子)

リヒター ハンス ペーター Hans Peter Richter

一九二五— 西ドイツの社会学者、児童文学作家。『あのころはフリードリヒがいた』(一九六一)でナチスのユダヤ人迫害を、『Wir waren dabei ぼくたちはそこにいた』(六六)でヒトラー・ユーゲントを、『Die Zeit der jungen Soldaten 若い兵士のとき』(六七)で前線の若い将校を書いた三冊が代表作。いずれも短いエピソードを連ねる叙事形式で、自らの体験をみつめ続けている。生きがい、暴力、母などのテーマで諸作家の短編を編集している。  
(上田真而子)

リヒター ルートヴィヒ Ludwig Richter 一八〇

三—八四 ドイツの画家、版画家。故郷ドレスデンで絵

と版画の手法を父カルル・アウグスト・リヒターに学びローマで修業(一八三二—二六)する。帰国後マイセンの磁器工場とドレスデンの美術専門学校で教える。ドイツの国民性と風習、伝説と童話の中に自分の本領を発見し、版画家として児童文学者とも深く関係する。

ムゼーウス、ライニック、ベヒシュタインなどの童話をその版画で飾る。リヒターは一八四六年にグリム兄弟の童話集に口絵を一枚入れるが版を重ねることに挿絵の数が増し、二三版では一八七枚になる。(植田敏郎)

リーフ モンロー Monro Leaf 一九〇五—七六 アメリカ児童文学作家、絵本作家。代表作『はなのすきなうし』(一九三六)は、簡潔な物語とローソンのイラストの組み合わせが幅広い層に受け入れられ、古典作品の地位を獲得している。『文法はおもしろい』ではじまった「……はおもしろい」シリーズは行儀、読書、安全の大切さを説く絵本だが、マンローの描いたコミック風イラストによって、読者に抵抗なく受け入れられている。(金平聖之助)

リュイロヴィダール フランソワ François Ruy-Vidal 一九三一— フランスの絵本出版者、評論家。教員生活ののち児童演劇の演出を経験、ブレヒトの異化作用を絵本の中で実現しようと試みる。死、時間、教育の危機、愛と挫折など、現代の子どもにかかわるテーマを取りあげ、テキストをデュラスはじめ現代作家に、

絵をクラウルー、ラボワントなどのイラストレーターに依頼、約三〇冊の絵本を出版した。その中にイヨネスコの『お話1番』から『お話4番』(一九七〇—七六)がある。(新倉朗子)

竜<sup>リウ</sup> ドラゴン、ワーム。一般に太いうろこのある大蛇の胴体、こうもりの翼、鋭い爪、尾には毒の針をもち口から火を吹く。ブリテン島本来の竜は北欧やサクソン系のワームで、翼はなく体は細長く、口からは火ではなく有毒の息を吐き、体は切られてもすぐつく。W・ヘンダーソン採集の民間伝承『The Linton Worm ラムトンのワーム』は、ワームの誕生から死までが語られている。ドラゴンとワームの共通の性質は、水辺や沼地に出没し財宝の番をし、乙女を好んで食べ、殺すのが難しいことである。ゲルマン神話およびイギリス最古の叙事詩『ベールオウルフ』(七—八世紀)にも、三〇〇年間宝を守る竜が登場し、英雄ベールオウルフと戦う。ヨーロッパの英雄たち、ヘラクレス、ジークフリート、聖ミカエル、聖ジョージなどが竜と戦って打ち殺し、美しい淑女や人々を救うのが聖人・英雄伝説の定型ともなっている。トールキンの『ホビットの冒険』(一九三七)に現れる竜のスマウグは、北欧系チュートン系で、ずる賢く人間のことを話し、財宝を守り翼をもち体に一カ所攻撃に弱い場所がある。C・S・ルイス『ナルニア国物語』第一巻では、欲深いユース

タスが夢から覚めてドラゴンと変わるが、悪者や魔女<sup>\*</sup>はドラゴンに変身するいい伝えに拠る。中国の竜は角と爪とつろことひげがあり、背骨にとげが立つ。真珠の玉をつかんでいるが、この中に力が秘められており、取り去ると力を失い人間に馴れる。へ天竜は神々の宮殿を背負い、へ神竜は風を起し、へ地竜は川を支配し、へ地下竜は財宝の番をし、へ海竜は水中の宮殿に棲み、海を制する。姿勢を変えれば山が動き、雲に乗っては雨を呼び、海上に姿を現せば嵐が起る。日本の神話に登場し、ササノオノミコトに退治される八つの頭八つの尾、背に松やこけの生えたヤマタノオロチは、我が国最古の大蛇でワームと類似している。伝説中の沼の主は白い大蛇が多く、乙女を食べることを好み、竜に変身して空に消えることもある。ギリシア神話のヒュドラー、ゲルマン神話のファーヴニル、エジプトの女神ハソールも異形の爬虫類で大蛇に近い。

(井村君江)

リユーティ マックス Max Luthi 一九〇九〜スイスの文芸学者。長くチューリヒの女子高校で教えたのち、一九六八年チューリヒ大学教授となり、ヨーロッパ民間文芸の講座を担当、七九年退官した。ヨーロッパで最も名高い昔話研究者の一人。昔話の研究は今日では、民俗学(人類学、文化史なども含めて)、心理学、文芸学の立場から行われているが、リユーティは昔話を

文学の一形式とみて、解釈学の立場から、昔話を昔話たらしめるゆえんを問うた。伝説、聖者伝、笑い話などと比べて、昔話というジャンルの文体的特性を明らかにしたのが、『ヨーロッパの昔話』(一九四七)である。『昔話の本質』(六二)、『昔話の解釈』(六九)は、その成果を実例に即して一般向けに説いたもの。『昔話—その美学と人間像』(七五)では、著者の関心が文芸学的考察から、民間文芸に描き出されている人間の姿に移りつつあることを示している。

(野村 滋)

リウトゲン Kurt Lütgen 一九一〜西ドイツの児童文学作家。アラスカ北岸で孤立した捕鯨隊員を飢えや寒さと戦いつつ犬ぞりで救出する話『オオカミに冬なし』(一九五五)をはじめ、『南海の航海王』(五〇)、『白いコンドル』(五二)など、優れた冒険物語が多い。歴史上の大航海者や探検家の話を、綿密な調査に基づいたドキュメントとフィクションで巧みに構成する。冒険心だけではない深いヒューマニティーが作品に深みを与えている。

(上田真而子)

良友<sup>りゆうゆう</sup> 児童雑誌。一九一六年(大5)一月〜二七年(昭二)八月まで確認。\*コドモ社の刊行にかかり、小学校低学年向き。当初は中村勇太郎が、一七年末から浜田廣介が編集を担当したが、二〇年一二月号で辞した。廣介は「良友」に『ほろほろ鳥』『呼子鳥』『雨と風との話』などを寄稿。以後、毎号童話を発表、その

代表作に『花びらの旅』や『椋鳥の夢』などがある。廣介の初期の傑作は本誌に発表されている。廣介のほか、安倍季雄、石川千代松、宇野浩二、木村小舟、白鳥省吾、千葉省三、細川武子らが、画家では川上四郎、河目悌二、田中良らが執筆している。本誌掲載の代表作に中村勇太郎『丈たか竹ちゃん』、前田晁『太鼓山と琴川』、水谷まさる『ぶら先生』、吉屋信子『湖のあし』などがある。なお、コドモ社からは幼年向けの絵雑誌「コドモ」が発行され、のちに小学校高学年の読者のために「童話」が創刊された。(根本正義)

リンクレイター エリック Eric Linklater 一八九九—一九七四 イギリスの児童文学作家、小説家。カーネギー賞受賞作の『月に吹く風』(一九四四)は、第二次大戦中、著者が陸軍中佐の時書いたもので、軽い作風の中にも、ナチズム批判を思わせるようなシリアスな面をのぞかせる。のちアバーティン大学学長、ロスIIクロマティ州副統監に就任。小説も多数発表している。ほかの児童小説には『緑の海の子賊たち』(四九)がある。(越智道雄)

リンザー ルイーゼ Luise Rinser 一九一—一九二〇の女流作家。オーバーバイエレンのピッツリントン生まれ。ミュンヘン大学で学んだのち小学校教師を務め、一九三九年より作家生活に入る。現在ローマ在住。みずみずしい感性と品格ある文章で子ども時代をつ

づつた『ガラスの波紋』(一九四二)は、ヘッセに絶賛された。四四年、ナチスに対する反逆罪で投獄される。戦後、『人生の半ば』(五〇)ほか多数の作品を発表。『マルチンの旅』(四八)は、少年を主人公にした児童書。(川西美沙)

リンゼイ ノーマン Norman Lindsay 一八七九—一九六九 オーストラリアの画家、作家。文芸誌「フリティン」の風刺漫画家として活躍し、油絵、挿絵のほか、小説も多い。児童書には、オーストラリアのファンタジーの傑作と評価される『まほうのプディング』(一九一八)のほか、『The Flyaway Highway 飛ぶハイウェイ』(三六)がある。『まほうのプディング』の動物のユーモラスな言動には、挿絵画家として、また、作家としての作者の多才な一面がみられる。(牟田おりえ)

リンチ パトリシア Patricia Lynch 一八九八—一九七二 アイルランドの女流作家。『The Tuff-Cutler's Donkey 泥炭掘りの跳ねるロバ』(一九三四)、『The Grey Goose of Kilmewn キルネウムの灰色がちょう』(三九)などにみられるように、リンチの作品はアイルランドの風物を素材にしながらも魔法と現実が一体化され、民話や神話の世界が日常世界の中で再現する、いわば、エヴリディ・マジックの手法によるものが多い。そして、それを無理なく成し遂げているのが特徴である。(定松 正)

リンドグレン Astrid Lindgren  
 一九〇七、スウェーデンの児童文学作家。一九四五年、少女文学作家としてデビューした、その年発表した『長くつ下のピッピ』で大きな人気を集め、作家として認められた。その後も次々と、『ピッピ』シリーズを出し、世界に知られるところとなった。さらに四七年よりさわやかで素朴な田舎の子どもの生活を描いた『やかまし村の子どもたち』、『やかまし村の子どもたちその後』(一九四九)、『やかまし村はいつもにぎやか』(五二)などの『やかまし村』シリーズ、また『名探偵カックレくん』シリーズを世に出した。その後、子ども向けの短編集『ぴちぴちカイサと子供たち』(五〇)や『ちいさい ロッタちゃん』(五八)では、スウェーデンの田舎や都会の子どもたちの四季の情景を生き生きとしたタッチで描いている。五六年の『さすらいの孤児ラスムス』では、世紀交代期の孤児院の男の子を描き、アンデルセン賞を受けた。さらに、四九年、孤独な少年たちとその想像豊かな世界を描いた「カールソン」シリーズでニルス・ホルゲルソン賞を受けた。さらにまた「マディッケン」シリーズでは再び故郷の幼年時代に取材し、「エミール」シリーズでは、今世紀初頭の田舎の日常生活を、愉快なユーモアで描いている。このほか『ミオよあたしのミオ』(五四)や『小さいきょうだい』(五九)では、民話に取材しながら、美しくも過酷

な世の中を描き、悲哀を帯びた世界を描き出している。最近の作としては『山賊のむすめローニャ』(八一)があり、これは好評を博し、映画化もされ、今なおリンドグレンの健在ぶりを世に伝えた。彼女の文体は弾力性に富み、簡潔であり、同時に、読者の感性を、知らず知らずに捕らえて放さない情感が底流となっている。

「長くつ下のピッピ」のながくつした Pippi Langstrump  
 長編童話。一九四五年。両親のいない一人の女の子のピッピが仔馬と猿のニルソンとともにたくましく生きていく姿を陽気に、快活に描いたものである。この作品の一番の特徴は、日常生活や保護者の要求や価値観を超えた中に、子どもの夢を体現させているところにある。すなわち、子どもの夢をかかなえる理想の世界を豊富な空想とユーモアの永遠に続いていく楽園として描いている。道徳的教訓や慣習的価値観が文学の底流となっていないところは、スウェーデンばかりでなく、世界の児童文学においても、画期的、革命的なものであり、リンドグレンが創始した新しい児童文学分野であった。  
 (柳沢重也)